

特集

ぶどう膜網膜炎のイメージング検査

序 論

後藤 浩*

眼疾患，なかでも多くの網膜脈絡膜疾患の病態に対する理解は，最近の各種イメージング検査の進歩によって飛躍的に深まっていったことは周知の通りである。ぶどう膜炎，ぶどう膜網膜炎においても同様であり，診断における応用はもちろんのこと，治療効果判定にも大いに貢献している。本特集ではこれらのイメージング検査の現状とともに将来性について概説していただいている。

前眼部に生じる炎症性変化の評価については今日でも細隙灯顕微鏡による観察を上回る検査法はない。一方，前眼部光干渉断層計（OCT）では角膜混濁症例における前房内，あるいは隅角などの観察も可能であることに加え，さまざまな定量的評価を行える点が強みであり，今後も解析用ソフトの開発と普及によってはますます魅力的な検査法となっていくことであろう。

今日，ぶどう膜網膜炎の診断，あるいは治療効果判定等において後眼部 OCT はなくてはならない検査法のひとつとなっている。何よりも侵襲のほとんどない検査であることから診療報酬上の制限はあるものの，必要に応じて繰り返し何度も検査を行える点がメリットである。検査機器の精度の向上により，たとえば眼底白点症候群などにおける視力低下ならびに視野障害の原因を，網膜の微細構造の局所的な消失所見を示しながら患者さんに説得力をもって説明することができる。

OCT angiography (OCTA) は造影剤を静脈注射することなく眼底の病的血管を検出する優れた検査法である。もっとも，ぶどう膜網膜炎の場合，従来からの蛍光眼底造影検査で得られる重要な情報である血管からの蛍光色素の漏出，すなわち血管炎の評価ができない点は大きな欠点ではある。しかし，その蛍光漏出がないことを逆手に取って，病的となった網膜脈絡膜や視神経乳頭の微細な血管構造を捉え，特に炎症に伴う虚血性変化を観察する際には極めて有用な検査法であり，新たな知見が蓄積されつつある。

レーザースペックルフローグラフィ（LSFG）は眼底の血流を解析するための非侵襲的なメイトインジャパンの解析装置である。血流の評価には血流速度の相対値が用いられ，さまざまな炎症性，あるいは非炎症性眼底疾患を対象に計測データが報告されている。各疾患の病態における異常な血流変化の把握とともに，治療効果に伴って血流が正常化していく様子を捉えることが可能とされる。

眼科に限らず，昨今はよろず低侵襲な検査がもてはやされ，上記の4検査も患者への負担はごくわずかに過ぎない。しかし，網膜脈絡膜における炎症性疾患の病態の把握や治療効果判定において蛍光眼底造影検査に勝る検査はない。近年では眼底の隅々まで正面視のまま，あるいはわずかな眼位の移動で撮像できる広角眼底造影検査が普及し，ぶどう膜網膜炎の診療にも大きな影響を及ぼしている。虹彩後癒着による小瞳孔のため検眼鏡

*Hiroshi GOTO 東京医科大学 臨床医学系眼科学分野

的検査に限界がある症例でも，本撮影法では病的な変化を確実に捉えることができ，また従来は見落としていたであろう眼底最周辺部の病変を観察できるメリットもある。

本特集で紹介された検査法のなかには，現時点では保険収載されていないものや，機器そのもの

が十分に普及していない検査も含まれているが，これらのイメージング検査は決して研究目的ではなく，ぶどう膜網膜炎の実臨床において大いに役立っていることは間違いなく，今後もますます臨床への応用が期待される。